

追憶シリーズ

わが学院の歩みの中から

校祖 ホーイ先生の生涯

花輪 庄三郎

「追憶シリーズ」の「わが学院の歩みの中から」は、校祖の生涯を振り返る。昭和元年(1926)に創立された東北学院は、その歩みを続ける。このようにホーイ先生が創立

初学院(当時山形県立学校の)賜暇を得て帰米することになり、二子を養って学校内における宗教がある。丁度その頃、特許の取得に、ある。加入して川内院長は「天日本海外教育を禁止した。あつた。校の伝道局からホーイの許に送金されて、間もなくある後、ホーイの視察旅行に忙し、最高指導者、良教師は仙台をほなれ生徒数は激

イ先生の宅に一人の看護婦が押し入り、保留の九千円のうち七千円を強奪された事件があった。

しかし、ホーイ先生は、その出来ごとを誰にも口外しなかった。そしてその後四年間極度に節約して、その間に米国の資金を処分したり、親戚から借入したりして大金を補填したと伝えられて

このようにホーイ先生が創立

年表で見る 東北学院昭和史

- 昭和三十五年**
(一九六〇)
○日本基督教団東部道徳協議会を本学にて開催(一月二十六日)
○チリ大地震のため太平洋沿岸に津波来襲、三陸地方被害甚大(五月二十四日)
○米シモン・ボイパ派遣三宣教師着任東北学院中、高校教職員組合結成(十一月十五日)
- 昭和三十六年**
(一九六一)
○文経学部英文科に専攻科(一ヶ年)を設置(四月一日)
○創立七十五周年記念祭を行(五月十五日)
○創立七十五周年記念祭招待(四月二十五日)
○五月二日まで、
○野間記念道場再興第一期工事(柔道) 献堂式(五月十日)
○工学部用地買収(多賀城旭ヶ丘、三三三、七〇三、三坪) 附属建築物を含む(四月一日)
○東北学院幼稚園開設(四月一日)
○大学自然科教室用地(土蔵)買収(ライオンタワー)駐日米大使夫妻来校(日本民間放送連盟第十四大会(仙台)出席の序をもつて(五月十日))
○野間記念道場第二期工事(剣道場)落成(十月十七日)
○工学部校舎(第一期工事)落成式(十月三十一日)
○工学部校舎(第二期工事)落成式(十一月十一日)
○ミス・アンケニー婦(定年制)により十一日三日離仙
- 昭和三十七年**
(一九六二)
○押川記念館(学生ホール) 献堂式(二月十五日)
○工学部学生宿舎開設(四月一日)
○工芸部デザイン・グラフィック・センター完成(本館三階)(四月一日)
○ロバート・ゲルハート追悼会(押川記念館にて五月十五日)四月十五日永眠、本葬國際基督教大学(四月十八日)八月二十五日永眠、本葬青山市立長津宮(八月二十一日)八月二十六日永眠、本葬野間記念道場再興完成式(命名練心館)野間記念道場再興完成式(命名練心館)
- 昭和三十八年**
(一九六三)
- 昭和三十九年**
(一九六四)
○マンセン・デ・イ教授来日(二月五日)
○従来の「文経学部」を「文学部」「経済学部」に分離(四月一日)
○文経学部二部を「文学部二部」「経済学部二部」に分離設置した(文学部長中村重夫、経済学部長小田忠夫、理学部長小田忠夫) 新任永井健三学部長就任式(四月七日) 大学院を新設して文学研究科(修士課程)を置いた(四月一日)
○「六十六年」講義(経済学・英語) 就任式(四月一日)
○「六十七年」講義(経済学・英語) 就任式(四月一日)
○「六十八年」講義(経済学・英語) 就任式(四月一日)
○「六十九年」講義(経済学・英語) 就任式(四月一日)
○「七十一年」講義(経済学・英語) 就任式(四月一日)
○山根新理事長就任(十一月五日) (法学部長津田蔵之丞)
○大学経済学研究所設置(四月一日) (経済学研究所長中村重夫)
○宮城郡土庫女子寮開設(四月一日) (二八二・三五五) (購入価格八、一七二、七四八)
○中学校舎新築(十一月二十日)
○中学校舎新築(十一月二十日)
○東北学院創立八十周年記念式(同記念行事五月十五日)
○「六十六年」講義(五月十六日)
○「六十七年」講義(五月十六日)
○「六十八年」講義(五月十六日)
○「六十九年」講義(五月十六日)
○「七十一年」講義(五月十六日)
○日本英文学会第39回大会主催校となる。(五月十七日)
○日本キリスト教学生会東北支部結成・第一回学術大会主催(六月五日)
○高松(楢ヶ岡)は慣例の修学旅行を廃して、吾妻山(天台高原)にて修学旅行開催の例をつくつた。(七月二十一日〜二十五日)
- 昭和四十年**
(一九六五)
- 昭和四十一年**
(一九六六)
- 昭和四十二年**
(一九六七)
- 昭和四十三年**
(一九六八)
○工学部第三期工事(号館) 献堂式を挙げた。
○工学部第三期工事(号館) 献堂式を挙げた。
○工学部第三期工事(号館) 献堂式を挙げた。
- 昭和四十四年**
(一九六九)
○工学部第三期工事(号館) 献堂式を挙げた。
○工学部第三期工事(号館) 献堂式を挙げた。
○工学部第三期工事(号館) 献堂式を挙げた。



晩年のホーイ先生

昭和元年(1926)に創立された東北学院の歴史を振り返る。このようにホーイ先生が創立

仙台訪問はその最後であった。同船は翌二十五日に横浜を解纜し米国に向い、数日後の三月七日に東京に着いた。その後次は朝鮮、湖南省岳州を指して仙台を去って行った。

シネター先生は、このことを記録して「ホーイ氏は学院創立者の一人であり、常に指導的な精神をもって来た一人であった。彼の信仰と献身と熱情とは、彼の去つた後も学院の中に非常な遺産となつて永く残るであらう。彼の辞職は日本および米国の多くの人心からいたく惜まれた。云々」と

ホーイ先生の遺骸は湖南地方は、元来排外思想の強い地方ではあつたが、天啓の勇断をもって湖南省岳州市外に地を託して「求神学堂」を創立し、爾來二十五年間、この地に在りて、教会、女学校病院等を経営し、支那青年のキリスト教教育に専念された。その間、米國との往來の都度、日本を詣り、東北学院にも立寄られたが、

と憂愁の色につつまれていた。同船は翌二十五日に横浜を解纜し米国に向い、数日後の三月七日に東京に着いた。その後次は朝鮮、湖南省岳州を指して仙台を去って行った。

シネター先生は、このことを記録して「ホーイ氏は学院創立者の一人であり、常に指導的な精神をもって来た一人であった。彼の信仰と献身と熱情とは、彼の去つた後も学院の中に非常な遺産となつて永く残るであらう。彼の辞職は日本および米国の多くの人心からいたく惜まれた。云々」と

ホーイ先生の遺骸は湖南地方は、元来排外思想の強い地方ではあつたが、天啓の勇断をもって湖南省岳州市外に地を託して「求神学堂」を創立し、爾來二十五年間、この地に在りて、教会、女学校病院等を経営し、支那青年のキリスト教教育に専念された。その間、米國との往來の都度、日本を詣り、東北学院にも立寄られたが、

遊佐敏彦氏を憶う(上)

東北学院理事 三沢房太郎

転任してその地の小学校に入り、その年、仙台に移り小田原大行院町に住まわれた。その頃から父上は病に親しまれるようになったので、同氏は山形郵便電信局に勤め、夜の講習塾五城中、学に入り勉学の意欲を幸うじてみた。しかし何よりも疑問の学問に没入した。しかし、何よりも疑問の学問に没入した。しかし、何よりも疑問の学問に没入した。しかし、何よりも疑問の学問に没入した。

かくして氏は動きながら学院で勉強することとなった。シネター先生宅の風呂の水汲み、スーター先生宅の手伝い仕事も新聞配達の仕事もした。明治四十二年普通部を卒業して高等部へ入った。この頃、更に一層広く勉学する機会を得た。と思つて来た。たまたま東京明治学院神学部の学生で、夏期伝道の手伝いに仙台に来ていた馬場成久氏に会い、その時、同学院高等神学予科に入学した。明治学院では同級生に松尾道徳氏、一級上には渡辺勇助氏、二年上には村田四郎氏、三年上には中山樹氏、渡辺善次氏、蔵川豊彦氏が居られた。教授陣には井澤健之助氏、山本秀雄氏、ライオン・博士(前駐日米大使の父)の諸先生が居られた。

氏はこの頃アシシの聖フランシスコに傾注していた。勤労と実践を通じて、生きた伝道志士としてこの年結婚生活に入り、日暮里の貧民窟、成徳園の傍らに、問題の研究と伝道とに従事した。秋には一家を移して新潟県村松町に引っ越して来た。次いで大正四年山口県山口市へ行き、同地の城中学校の英語の教師として勤務した。このとき本間啓次氏より偉大なる感化を受けていた。大正六年八月再び日暮里に帰って来た。このときの同氏の心境は、蔵川豊彦氏のように貧民窟の聖意を志したのかも知れない。

大正七年四月蔵川豊彦氏の求めに応じて神宮に渡り、兵庫興教済協会生田口入所(現在の職業安定所)を開業、職業紹介の事業にたずさわることとなった。